
賢者の石

楓 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者の石

【Nコード】

N4968H

【作者名】

楓 紅

【あらすじ】

ハリー・ポッター子世代です！親世代を書き進めるのに、少しばかり、子世代も書くころかと思って書きました！

ハリーとの出会い

僕の名前は、ハリー・ポッター。

普通とは言えない生活を送り、家族を知らない僕に、突然、大きな出来事が起きる。

11歳を迎えた頃、僕の周りには、少しばかり不思議な事が起こり始めていた。

僕が怒ったり、感情的になると、周りに変化をもたらしたのだ。

それが、魔法だと知る時が来たのだ。

ハリー「……。」

ペチュニア「ハリー！起きなさい！早く！」

ハリー「ん……。」

階段下の物置の中から、起き上がっている中、階段上から、ドストと足音が鳴り響く。

ダドリー「動物園！動物園！おい！起きろー！」

階段上で跳ね上がると、ハリーの上に煤やゴミを落とした。

ハリーが、階段下の物置から出た所を見計らい、ダドリー少年は、体をぶつけて中に押し戻した。

ペチュニア「おはよう！ダドちゃん！いい誕生日日和ね！」

ダドリー「プレゼントは?!」

バーノン「22個あったよ。今年もすごい量だ！」

ダドリー「22個?!去年は、23個あった！」

バーノン「そうだが、今年のは大きい物ばかりだ。」

ダドリー「大きくっても、23個ない！」

ダドリーが、激怒しながら告げる様子をハリーは苦笑し見やる。

ペチュニア「わかったわ！ダドちゃん。動物園に行つて、帰りに買いましょう?それなら、文句ないでしょう?」

ダドリー「24個目も?」

ペチュニア「わかったわ。24個目も買ってあげるから、機嫌を直して?」

バーノン「早く食事の準備をしろ！」

ハリー「はい。叔父さん。」

目玉焼きを軽く焼きながら、返事を返すハリー。

そして、動物園に向かおうとして、車に乗り込もうとした時だった。

バーノン「良いか！小僧！何か、悪さをしてみる！物置に一生、閉じ込めてやる！」

ハリー「はい。叔父さん。」

こうして、動物園に向かう中、上空から、様子を伺ってる人物がいた。

「ハリー……。」

この女性と、ハリーが出会うのは、あともう少し。

動物園に辿り着き、ダーズリー一家と堪能していた時だった。

ダドリー「蛇だ！カッコイイ！」

蛇『……』

ダドリー「おい！動け！」

ドンドンとガラスを叩くも、蛇は無関心だ。

ダドリー「つまらないの！」

ハリー「……可哀そうにな。こんな狭い所に入れられて。」

蛇を見つめて、呟くハリー。

「そらでもないかもよ？」

ハリー「え？」

「この蛇は、周りから、五月蠅く言われなくって、意外と気楽かも。」

ハリー「・・・そうかな？家族が居なくって、僕は寂しいよ。」

「家族は、生まれてこの方、居なくっても、ちゃんとできるよ。」

ハリー「？どうやって？」

「結婚とか？」

ハリー「・・・プツ。面白い事、言うね。君。」

僕は、彼女の言葉に、つつい笑ってしまった。

「あ。蛇が、起きた。」

ハリー「え？」

蛇『熱々だな。アンちゃんら。』

ハリー「・・・ねえ。今、何か聞こえた？」

「私は何も？」

ハリー「そう・・・だよね。」

ダドリー「！パパ！見て！蛇が起きてる！」

ハリーは、ダドリーに押しつけられ、怒りが感情を支配した瞬間、蛇の入っていたショーケースが消え、ダドリーが代わりに中に入った。

その間に、僕が話していた、女の子の姿がなくなっていた。

ホグワーツへゴー！

動物園での事件があつて、僕は、2、3日、物置に閉じ込められた。

そして、家の中に居た時に再び、事件が起きた。

郵便を受け取った中に、ハリーポッター宛て・・・僕宛の手紙があったのだ。

だから、その手紙を手に取り、開封しようとしたが、ダドリーに見つかり取られる。

ダドリー「パパー！ハリーが、手紙持つてる！」

ハリー「返せ！それは、僕の手紙だぞ！」

バーノン「貴様に手紙だとー？」

そう言い、手紙の差出人を確認すると、バーノン叔父さんの顔はみるみると変わった。

バーノン「手紙の事は忘れろ！」

そう言うと、手紙を破り捨てるバーノン叔父さん。

だが、その直後、家のインターフォンが家中に鳴り響いた。

バーノン「？今日は、誰も来る予定はなかったはずだが？」

扉を開けながら告げ、そこには、可愛い女がいた。

バーノン「何の用だい？」

「あ！ダーズリーさんのお宅ですか？私、この間、動物園に居たんです！」

バーノン「それで？用件は何だい！」

「あ……すみません。ダドリー君を一目見て、一目惚れしてしまったのです！この間、動物園で一目、見た時から好きでした！／＼」

バーノン「！ダドリー！ダドリー！」

ダドリー「？なあに？パパ？」

ダドリーが、扉の前に来て女を見やる。

ハリー「?!」（あの子は！あの時の…）

「ダドリー君！これ、この間、誕生日だと聞いたの！良かったら貰ってくれる？」

ダドリー「え？……でも／＼」

「やっぱり……無理だね。見知らぬ女からのプレゼントなんて。」

悲しそうに言い、プレゼントを下げ去ろうとする彼女。

「ダドリー」！貰う！貰うよ！ありがとっ！」

彼女の手の中のプレゼントを奪い取り、中身を開封しようとする。

「しゃがんで。」

「ハリー」？」

「しゃがんで。」

そう、クチパクでアピールしながら、女の人はその場にしゃがむ。

ハリーもその様子に気づき、その場でしゃがむと同時に、体格のいい少年がプレゼントを開け切った。

すると、何かが、プレゼントの中で弾け、男の子は汚れた。

「ペチュニア」！！「ダドちゃん？！いったい、何があったの！？」

「あれ？間違えた？これは、ハリー・ポッターにあげるんだっただけ？」

プレゼントをあげた本人は、呑気な事を言っている。

「人の物を取ったりするから、そういう目にあうんだよ？それじゃ、ダドリー君にあげる予定の物を君にあげよう。」

「ダズリー一家が、混乱してる中、女の方はハリーにプレゼントを差し出す。」

ハリー「これ・・・僕に？」

少し疑いながら、箱を受け取る少年。

すると中から、新品のローブや筆記用具、羊皮紙などが入ってた。

ハリー「？あの・・・これは？」

「ホグワーツ必需品だよ？あれ？手紙、読んでないの？駄目じゃないほら。この手紙が来たでしょ？」

そう言いながらホグワーツ魔法学校の手紙を差し出す女性。

ハリー「これ・・・破られて見る暇がなかったんです！」

手紙を開封しながら小さく呟くハリー。

すると中には、ホグワーツ入学許可証と、必要なものが書かれていた。

ハリー「？・・・あのー？これっていったい何？」

「言ったでしょ？魔法学校の入学許可証。ハリー。貴方は、魔法使いなの。」

ハリー「僕が？・・・それで、君は一体？」

「ああ！自己紹介がまだだったね！私の名前は、シエン・ハウスー。ホグワーツの教員兼生徒観察官です！」

にっこりと微笑みいう彼女はとても綺麗だと思った。

ハリー「それで……どうするの？あれ？」

ダーズリー一家は、騒いだまま、ダドリーを見ていた。

「体を洗えば落ちるわ。ハリー。移動しましょうよ！ここに居たつてつまらないでしょ？」

ハリー「移動するって……何処に？」

「私の家。」

ハリー「……ええええ？！／／／」

「ほら。行こう。乗って。どうせ、ルビウスも来るだろうし。」

ハリーの声を無視し、箒に跨る彼女。

「箒に乗るのは初めてだよね？私にちゃんと捕まってるね。」

言いながら、ハリーの手を引っ張り、箒に乗せると空を飛ぶ。

ハグリッドと銀行へ

そうこうしてる間に、彼女・・・シエンの家に着いた。

「入って？何も無い所だけど。」

家の中に案内しながら告げるシエン。

ハリー「シエンさんは、どうして、僕の事を？」

「・・・うん。そうだね。話さないといけないかな。ほら。見て。この写真。」

そう言いながら、ハリーに一枚の写真を見せる。

ハリー「？・・・これって・・・お父さん？お母さん？」

「私のじゃないよ？・・・ハリー。貴方の両親の写真。」

ハリー「・・・え?!どうして、シエンがこの写真を?!」

「私は、ハリー。君の両親の知り合いであり、友達なの。」

ハリー「・・・父さんたちと同じ年？」

「そう。だけど、私は20歳の姿のまま止まってしまってる。」

ハリー「そんな事って、あるの?」

「魔法界じゃ、稀だろうけれど、ない事はないよ?」

微笑み説明していると、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968h/>

賢者の石

2010年10月13日11時55分発行